対面学習とオンライン学習の適正化に関する一考

田上　正範

Proposal for Enhanced Online Learning Communication

Masanori　TAGAMI

（追手門学院大学）基盤教育論集　第8号（2021年3月）
Bulletin of Institute of Liberal Arts
Otemon Gakuin University（No. 8）
March 2021
pp. 101－106

追手門学院大学 基盤教育論集 第8号（2021）ISSN 2188-4536

対面学習とオンライン学習の適正化に関する一考

田上　正範

Proposal for Enhanced Online Learning Communication

Masanori　TAGAMI

【キーワード】コロナ禍、対面、オンライン、学習スタイル、非言語メッセージ、
非言語コミュニケーション、視覚的思考、聴覚思考

要　旨

コロナ禍の影響から対面形式の講義は余儀なくオンライン形式に変わった。しかし、実際に取り組むとオンライン形式の方に適した学習者が存在した。そこに、教育者が提供する学習スタイルに見落としがあり、対面形式を基本とする考えに先入観があると考えた。そこで、その根底にある概念を調べ、対面形式とオンライン形式での学習スタイルの適正化について一考し、学習者の成長過程に合わせた学習環境を提案するものである。

1．背　景

2020年春、コロナ禍の影響により、対面形式の講義は余儀なくオンライン形式に変わった。“仕方なくオンラインで代用する”。当初、オンラインは対面の一部を補完するに過ぎないと捉えて取り組んだ。しかし、実際に行ってみると、対面と変わらない場面が散見され、オンラインの方がよく理解しているように見える場面も出てきた。オンライン形式の方が成績のよい学生もみられ、対面形式の再開を聞いて体調を崩す者がいる事象も生じた。さらに、ICT活用が必然となったため、対面形式では見えなかった学習者の学習行動を可視化できることもわかってきた[1]。つまり、対面形式の方が混乱を招き、オンラインの方が適した学習者が存在するのである。そこには、教育者が提供する学習スタイルに見落としがあり、オンラインは補助的なものであり、対面が基本と考えてしまうような先入観があると感じた。

そこで、本稿は、対面形式を基本とする考えに疑問を抱き、その根底にある概念を調べ、対面形式とオンライン形式での学習スタイルの適正化について一考する。

[1] 田上正範・江原謙介(2020)「対人コミュニケーションが求められるリーダーシップをオンライン型授業で育む教育実践」2020年度ICT利用による教育改善研究発表会、私立大学情報教育協会, 46-49.

２．近代教育で生まれた言葉（ことば）の誤解

言葉は、読む、書く、話す、聞く（聴く）の４つに分類される。外山（2014）[2]は、「話し聴くことば、耳のことばは、生活的、実際的にあって、文化をつくることができないように考えれば、読み書くことば、目のことばは文化的で、知的であるとなるだろう。それが誤解である。近代教育によって生まれたものである」と記す。「ものを考えるには、耳のことばの方が適しているのではないかと思われるのは、西欧における新しい思考、新しい発想は、話すことば聴覚言語によるところが多かったのである。日本人の思考、発想は、生活からはなれた観念によってすすめられているように思われる。人々は実際から遊離している方が高級、高邁であるような錯覚を有する。思考、思想に生気が欠けているのは、聴覚思考を忘れているためであろう」。

続いて、外山（2014）は、ことばの教育は家庭でするものと決まっていて、家庭ではかなり、ことばのしつけに気をつかったころは、日本と欧米の差はさほど大きくなかっただろう。しかし、日本の初等教育は、欧米に習い読み書きの能力を重視し、話す聴くは家庭で行うものとしてきた。そして、文字、文章を高級なことば、話し聴くことばを低いものとして扱うようになった。博学多識を評価し、聴覚思考をバカにするようになったと、日本語をめぐる問題を指摘している。

つまり、重視した“読み書く”言葉は教育の制度に採り入れて体系化され、一方の“話す聞く”言葉は家庭や現場に任せてきた慣習があったと言える。

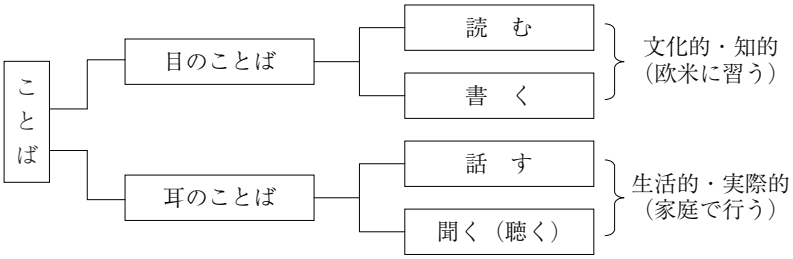

図１　ことばの分類

３．社会的知性

知能指数を示すIQに対して、こころの知能指数を示すEQを提唱したダニエル・ゴールマンは、第三の能力として、生きかたの知能指数を示すSQ（社会的知性）を提唱している。他者の感情を読み取り、社会生活を営むために不可欠な能力である。ゴールマン（2007）[3]によると、社会的知性は、社会的意識（他人について何を感じ取れるか）と社会的才覚（そのうえでどう動くか）の大きく２つに分類される。社会的意識は、他者の感情に寄り添い、非言語的な情動の手がかりを読みとる能力、相手に波長を合わせて傾聴する能力、他者の思考・感情・意図を理解する能力、社会のしくみを理解する能力などが含まれる。社会的才覚には、他者との相互作用を非言語レベルで円滑

[2] 外山滋比古（2014）「聴覚思考」中央公論新社, pp7−12, 19−24.

[3] ダニエル・ゴールマン、土屋京子訳（2007）「SQ生きかたの知能指数」日本経済新聞出版社, pp130−133, 531.

に処理する能力、自分を効果的に説明する能力、他者とのかけひきの中で自分を望む結果を実現する能力、他者のニーズに心を配り、それに応じて行動する能力、などが含まれる。

つまり、社会生活を営むためには、言語を認知する能力だけではなく、非言語的な情報を読み取り、非言語レベルで処理し、行動する能力が必要となる。

4．非言語メッセージ

人と人とのコミュニケーションの非言語的な行動に着眼し、これらの情報を「非言語メッセージ」とする研究がある。リッチモンドら（2006）[4]は、非言語メッセージは「感情的、関係的、情動的機能を供給し、（沈黙であっても）連続的であり、決して止まらないものである。送り手は意図的に送る場合もあるが、意図せずに送る場合もある。しかし、受け手が解釈しなければ、コミュニケーションが成り立ちたない」と述べている。非言語メッセージとコミュニケーションの関係を表 1 に示す。

表 1　非言語メッセージとコミュニケーションの関係

		送り手	
		意図的に送る	意図なしに送る
受け手	解釈する	コミュニケーションが成立	コミュニケーションが成立
	解釈しない	コミュニケーションが不成立	コミュニケーションが不成立

引用：リッチモンド他「非言語行動の心理学」北大路書房(200), p7. より筆者改訂

さらに、リッチモンドら（2006）は非言語メッセージの要素として、外見的特徴やジャスチャー、動作、表情、視線、音声、空間、接触の他、男女や職場、異文化での人間関係などを挙げている。また、パターソン（2013）[5]は非言語メッセージの要素を大きく 3 つに分類している。その分類を一覧にしたものが表2である。表 2 より、非言語メッセージは多岐にわたり、複雑に絡みあっていることがわかる。

表 2　非言語メッセージの分類

分　類	内　容
構成要素	デザインと配置（物理的環境）・外見・対人距離と向き・視線行動・顔/表情・姿勢と動作・ジャスチャー・接触・嗅覚的手がかり・関与・行動傾向等
組み合わせで他人に影響するもの	生物要因（安全性と社会的比較、配偶者選択、養育）・文化（接触-非接触、個人-集団主義、権力格差、コンテクスト）・性差（表出性と感受性、コミュニケーションスタイル）・パーソナリティ（社会的接近-回避特性、場依存-独立、セルフモニタリング）等
社会生活を営む中で影響するもの	情報提供、相互作用、親密性、対人影響力、印象操作等

引用：パターソン「ことばにできない想いを伝える」誠信書房(2013), pp.28-163. より抜粋

[4] V・P・リッチモンドら(2006)「非言語行動の心理学」北大路書房, pp.4-12.

[5] M・L・パターソン(2013)「ことばにできない想いを伝える」誠信書房, pp.28-163.

非言語情報に関わるコミュニケーション（非言語コミュニケーション）の研究には、障害者（鏡原2020）[6]や発達段階（関2018）[7]に関するもの、脳波（岩木2017）[8]や心拍（折原2019）[9]を用いた科学的分析、心理分析（難波2017）[10]などがある。また、E.メイヤー（2015）[11]は異文化理解の国際比較を8つの領域に分類化している。教育については、国際理解に関する教育実践は既に大学等でカリキュラム化されている。但し、異なる文化や言語に着眼したものであり、体験的な学習が多い。また、看護学生（畑山2017）[12]や心身障害児（林2018）[13]を対象にした教育研究もある。

これらの研究の被験者は幼児や児童、障害者を対象にしたものが多く、非言語メッセージを解釈できる側が優位（前提）となり、解釈できない被験者を対象とするものが多いと考える。国際的な言語や文化の違いについても解釈できる側が優位な側面は同様と言える。また、体験的な学習は、多岐にわたる非言語メッセージを提供できる学習環境といえるが、現場任せになることが多い。リフレクションやフィードバックによって教育効果を高める方法があるが、非言語メッセージを解釈できる側が優位になる側面は変わらないと考える。

5．まとめ

これまでの項目を次のようにまとめる。

- “読み書く”言葉に比べ、“話す聞く”言葉は体系化されておらず、現場に任せてきた慣習がある。
- 社会生活を営むためには、非言語レベルで行動する能力が必要となる。
- 非言語メッセージを解釈できないとコミュニケーションは成り立たない。
- しかし、非言語メッセージを解釈できる側が優位（前提）となる現実がある。

これらを言い換えると、社会生活を営むために非言語コミュニケーションが必要であることが先入観となり、非言語メッセージを解釈できることが前提となってしまう実態があると考える。

教育現場に置き換えると、読み書く”言葉に比べて“話す聞く”言葉は体系化されておらず、十分な学習環境があるとは言い難い。非言語メッセージは複雑多岐にわたっており、非言語メッセージを解釈できない方が自然であり、学習者の成長過程といえるのではないだろうか。

---

[6] 鏡原崇史ら（2020）「自閉スペクトラム症者における非言語コミュニケーション」自閉症スペクトラム研究, 17(2), 5-13, 2020-02.

[7] 関一夫（2018）「音声とジェスチャーの分節化：発達認知脳科学的手法による相互発達過程の解明」科研（研究領域提案型）研究課題18H05061, 2018-2019.

[8] 岩木直ら（2017）「脳波ハイパースキャン技術を用いた非言語的意思疎通の評価と操作」科研（萌芽）研究課題17K20020, 2017-2019.

[9] 折原レオナルド賢ら（2019）「心拍情報を用いた非言語コミュニケーションの分析」IEICE technical report：信学技報, 119(190), 21-24, 2019-08-29.

[10] 難波修史ら（2017）「「真の笑顔」と「偽の笑顔」の違い：動きの順序が他者の情動認知に及ぼす影響」対人社会心理学研究, 17, 45-51, 2017-03.

[11] E.メイヤー（2015）「異文化理解力」英治出版.

[12] 畑山知子ら（2017）「看護学生を対象としたボディワーク構築の試み」南山大学紀要(13), 149-162.

[13] 林恵津子ら（2018）「重症心身障害児の生理心理学的評価・情報をもって保育者の自己効力感を高める」科研：研究課題18K02796, 2018-2020.

ここで、対面形式とオンライン形式の学習スタイルを表3にまとめる。オンライン形式は同期型（同時双方向型）と非同期型（オンデマンド型）に分けられ、さらに非同期型はビデオ配信とテキスト配信に分けられる。オンデマンド型は要求に応じて情報を入手し、学習者が勉強したいときに利用することができる。よって、個人の意思で勉強し、個人のスキルを高めたい場合に適した環境と言える。一方、対面形式には、少なくとも教育者と学習者の二者以上の対人関係があり、学習者が複数になれば三者以上の対人関係が生じる小さな社会となる。よって、対人関係の中で身につくスキルを、対人スキルを高めたい学習者に適した環境と言える。また、オンライン形式の同期型は、同時双方向のライブ配信されるシステムであるため、少なくとも教育者と学習者の二者以上の対人関係が生じる。よって、対面形式と同様に対人スキルを高めたい学習者に適した環境と言える。但し、対面形式と違い、直接会わず、画面越しに会う対人関係となる。そのため、表情や動作、音声といった非言語メッセージが限定された環境となる。よって、対人スキルを高めたい学習者であるが、直接人と会うと緊張し、ストレスを生じるタイプに適した環境と言える。他方の対面形式は、直接人と会うと刺激をもらい、モチベーションが上がるタイプに適した環境と言える。

ここで大事なことは、非言語メッセージを解釈できない方が自然であり、学習者の成長過程であることを前提にすることである。つまり、対人スキルを高めたい学習者に、対人関係の中で身につくスキルを修得させる場合、対面形式だけではなく、同期型のオンライン形式に適した学習者が存在することを見落としてはいけない。また、非同期型の場合も、ビデオ配信による映像や音声を好む学習者は、耳の言葉で考える、つまり聴覚思考のタイプであり、テキスト配信を好む学習者は目の言葉で考える、つまり視覚的思考のタイプであると言える。

表3　対面形式とオンライン形式の学習スタイル

学習形式	対面形式	オンライン形式		
		同期型（同時双方向）	非同期型（オンデマンド）	
主な媒体	教室	ライブ配信	ビデオ配信	テキスト配信
		Webex / Zoom	Mediasite / YouTube	WebClass
修得スキル	対人関係の中で身につくスキル		個人で勉強して身につくスキル	
学習者の嗜好	対人スキルを高めたい		個人スキルを高めたい	
学習者の特徴	直接会うと刺激を受ける	直接会うと緊張する	聴覚思考（耳の言葉）	視覚的思考（目の言葉）

-Webex　：シスコ社製のWeb会議システム
-Zoom　：Zoomビデオコミュニケーションズ社製のWeb会議システム
-Mediasite：メディアサイト社製の動画配信システム
-YouTube：グーグル社が提供する動画共有サービス
-WebClass：日本データパシフィック社製の学習管理システム（LMS）

最後に、読む、書く、話す、聞く（聴く）の４つの分類に対し、非言語メッセージの育み方についての提案を図２にまとめる。まず「読む力」には「行間を読む」ことが挙げられる。文字では表現されていないが文章を書いた人が伝えたい意図や気持ちを読み取る（感じ取る）ことである。次に、「書く力」には、何度も何度も書き直す手立てが挙げられる。卒業文集や作文など、大事な作品であるほど書き直すことは有効であることが知られている。

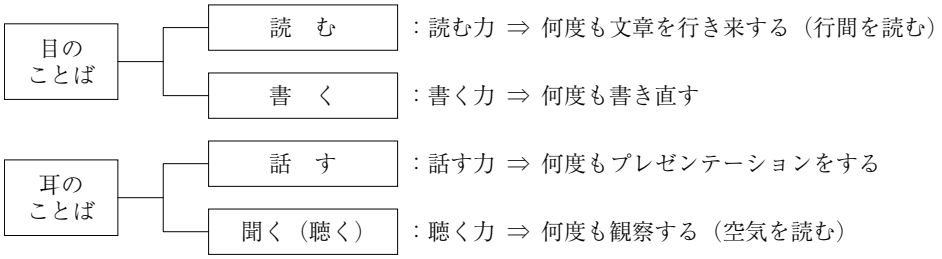

図２　非言語メッセージの育み方の提案

ここで、読み書く言葉をモデルにして、話す聞く言葉も同様に考える。「話す力」は何度もプレゼンテーションを行うことによって、相手に伝える力を育むことができる。発表会やコンテストなど、大事なテーマを課し、何度もプレゼンテーションを行う機会を提供することである。また、「聴く力」は何度も相手を観察することによって、話す言葉に表現されていない意図や気持ちを聴き取る（感じ取る）ことである。話す人だけではなく、その場の雰囲気を察すると「空気を読む」力となり、集団での活動が円滑になる。

非言語メッセージは解釈できない方が自然である。読む力、書く力、話す力、聴く力、学習者の成長過程に合わせて組み替える学習環境が求められる。

以上

Abstract

Due to the current Covid−19 pandemic, face-to-face lectures have had to be taught online. However, in practice, there are learners who were better suited to the online format. Consequently, it seems that the Covid −19 pandemic has revealed a prejudice against online learning formats. Therefore, this paper examines face-to-face and online learning formats and proposes a more effective learning environment that fosters online communication skills in learners.